



## あいさつ

さいたま市立植竹小学校  
校長 鯨井 幹夫

本校では、子どもたちが、「自ら学び、自ら考え、生き生きと表現し合う」ことができるようにしたいという教職員や保護者の方々の願いのもと、平成27年度から思考力や表現力の向上、及び学び方の定着を目指して研究に取り組んできました。平成28年度からは、さいたま市教育委員会と埼玉県国語教育研究会の委嘱を受け、これまでの研究内容を継続しながら、2年間にわたり「国語力向上」を掲げて研究を進めてまいりました。

研究推進にあたっては、「全員で研究に取り組むこと」、「子どものための研究にすること」、この2つを大切にしてきました。

指導案をつくる先生だけが苦勞し、研究授業をするクラスだけが授業改善されるような研究では、学校研究とは言えません。カリキュラム・マネジメントの側面から考えても、PDCAの「Do」は、学校全体で実践する必要があります。特に、新学習指導要領では、「何ができるようになるか」(学習目標)と「何を学ぶか」(学習内容)に加えて、「どのように学ぶか」(学習方法)までもがカリキュラム・マネジメントの対象になりました。ですから、授業の方法についても全校で、日常的に、共通して実践することが必要になります。そこで、研究の縦糸として、各専門部において言語活動の具体化とラーニング・スキル習得に必要な手立ての構築や資料の作成を行いました。また、研究の横糸として、学年研修において単元構想や教材研究、指導案作成や授業準備を行い、全クラスで授業実践を重ねました。この縦糸と横糸によって全員で研究に取り組むことができました。

また、研究のあり方として、研究のための研究、指導案作成のための研究、発表会のための研究にならないよう気を付けてきました。そのため重視したことは、「日々の授業を大切にする」、「毎日毎日の授業の中で実践し定着させる」ことでした。特に、ラーニング・スキルの習得については、繰り返し、繰り返しやってみることで定着していきます。新学習指導要領で言う「主体的・対話的で深い学び」はスローガンではありません。目の前の子どもたちが主体的に取り組んでいるか、対話的に学びを進めているか、そこに新たな学びや深い学びがあるか、本校ではそれらを具体化することを目指してきました。しかしながら、本研究はまだ緒についたばかりです。子どもたちの主体的な学びもスタートしたばかりです。今後、皆様の御指導を仰いでさらに研究を深めてまいりたいと思います。

結びに、これまで本校の研究にかかわり御指導いただきました埼玉大学教育学部言語文化講座国語分野准教授 本橋 幸康先生をはじめ、さいたま市立植水小学校長 内河 水穂子先生、さいたま市教育委員会の指導主事の皆様には大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。併せて日頃より本校の教育活動を支えてくださっている保護者や地域の皆様に感謝申し上げ、挨拶といたします。ありがとうございました。